

<<2019年2月(通算270回目)月例会報告>>

サロン2002からのメッセージ①

ユース年代にリーグ戦を

—U-18 フットサルリーグ・チャンピオンズカップをめぐって—

本多 克己 (NPO 法人サロン 2002 副理事長/株式会社シックス)
中塚 義実 (NPO 法人サロン 2002 理事長/筑波大学附属高校)

【日 時】2019年2月27日(水) 19:00~21:10 (終了後は「旺達」~23:00すぎ)

【会 場】筑波大学附属高校3F 音楽室 (会議室の隣)

【テーマ】サロン2002からのメッセージ① ユース年代にリーグ戦を

—U-18 フットサルリーグ・チャンピオンズカップをめぐって

【演 者】本多 克己 (NPO 法人サロン 2002 副理事長/株式会社シックス)

中塚 義実 (NPO 法人サロン 2002 理事長/筑波大学附属高校)

【参加者 (会員・メンバー) 7名】

安藤裕一 (株GMSS ヒューマンラボ)、岸卓巨 (JADA)、清水絢子、茅野英一 (帝京大学)、
中塚義実 (筑波大学附属高校)、本多克己 (株シックス)、守屋俊秀 (世田谷サッカー協会)

【参加者 (未会員) 8名】

開沼位晏 (明治大学学生)、崔允敬=チェユンギョン (株JSP)、谷富慎一・錦戸蓮 (熊本国府高校)、
常木翔 (三井物産)、沼田隆治 (フリースタイルフットボール)、守屋佐栄、山本雅彦 (株みずほ銀行)

【報告書作成者】開沼位晏 (明治大学学生)

【目 次】

1. U-18 フットサルリーグ・チャンピオンズカップをめぐって (本多克己)
 - 1) U-18 年代のフットサルリーグチャンピオンズカップ創設まで
 - 2) U-18 フットサルリーグ・チャンピオンズカップ—現状と今後の課題
 - 3) ディスカッション①
2. ユース年代にリーグ戦を—日常的なリーグ環境の整備について (中塚義実)
 - 1) 日常的なリーグ環境の整備—ユースサッカー「DUO リーグ」を中心に
 - 2) サロン2002からのメッセージ—ユース年代にリーグ戦を
 - 3) ディスカッション②

1. U-18 フットサルリーグ・チャンピオンズカップをめぐって (本多克己)

1) U-18年代のフットサルリーグチャンピオンズカップ創設まで

まず、なぜこのような大会が存在し、今どのような状況であるのかについてお話ししたいと思います。

フットサルの1つの魅力は多様性を受け入れることではないかと思います。2000年頃から中塚先生たちを中心に東京都でU-18年代のフットサルの公式大会が始まり、そのうちリーグ戦できてきました。2010年にはホンダカップでU-18カテゴリーを新設しています。当時「全国にU-18のフットサルチームなんてないよ」と言われていましたが、大会を開催してみるとチームがたくさん存在していることがわかり、「全国大会を作ってあげないと」と思い始めました。

2012年3月に、名古屋のオーシャンアリーナで「U-18フットサルトーナメント2012」という大会を新設しました。JFAが大会を作ってくれるのが理想ではありましたが、JFAの方とやり取りする中で、まずJFAの外で大会を作ってそれをベースに公式大会にできれば、という話になりました。とは言うものの高体連とはしっかりと連携を取っていきたいということで、岡山県の作陽高校、愛媛県の松山商業高校、京都橘高校に対し、チームを出して欲しいという依頼をしました。熊本県からは選抜チームが大会に出場してくれて、9地域の代表による大会が行われました。

翌2013年3月もオーシャンアリーナで同大会が行われ、付帯イベントとしてサロン2002公開シンポジウム「U-18フットサルを語ろう！」が開かれました。このような民間主導の大会をやりながら、JFAのオフィシャル大会ができるまでに4、5年かかるだろうという話をしていたのですが、2014年にはJFA主催で単独チームの日本一を決める大会がはじまりました。JFA全日本ユース(U-18)フットサル大会です。「U-18フットサルトーナメント」は3年間続き、2014年度からは日本フットサル連盟(JFF)とサロン2002の共催で「GAVIC Cup ユースフットサル選抜トーナメント」に衣替えをし、引き続き行われました。

JFA主催の単独チーム日本一を決める大会がで

き、JFF主催の選抜大会もできました。次の課題は各地域で日常的にプレーしてもらえるリーグ環境を整備することです。それを促していくために、リーグチャンピオンによる全国大会を開催しようとなりました。当時は8都府



全日本ユース(U-18)フットサル大会

日本サッカー協会主催の大会として全国9地域で予選を開催。世代No.1決定戦となっており、高校サッカー部の出場比率が高まっている。

2014年 聖和学園FC(宮城)/大田区総合体育館、墨田区総合体育館
2015年 岡山県作陽高校(岡山)/ゼビオアリーナ、仙台市体育館
2016年 帝京長岡高等学校(新潟)/ゼビオアリーナ、仙台市体育館
2017年 矢橋中央高等学校(熊本)/ゼビオアリーナ、仙台市体育館
2018年 帝京長岡高等学校(新潟)/ゼビオアリーナ、カメイアリーナ仙台
※年/優勝チーム/会場



GAVIC CUP ユースフットサル選抜トーナメント

2015年から「U-18フットサルトーナメント」の名称を変更して全国9地域から選抜された12チームで開催。

2012年 名古屋オーシャンズU-18(愛知)/オーシャンアリーナ
2013年 瀬戸内高校(広島)/オーシャンアリーナ
2014年 帝京総合高校(千葉)/駒沢体育館
2015年 愛知県選抜U-18/墨田区総合体育館
2016年 U-18新潟県選抜/墨田区総合体育館
2017年 U-18新潟県選抜/墨田区総合体育館
2017年 U-18神奈川県選抜/和歌山ビッグホエール
2018年は開催されず

1. 日本サッカー協会(JFA)主催の選手権、日本フットサル連盟(JFF)主催の選抜大会が整備された。
2. 次は各地域でのリーグで日常的にプレーできる場をつかっていきたい。
3. リーグ設立を促すため、リーグチャンピオンによる大会を開催したい。
4. 2016年当時、8都府県でU-18フットサルリーグが開催されているが、8リーグ対象にJFA、JFFで大会を開催することは難しい。

法人格を取得したサロン2002が主体となって大会を開催しよう!

U-18フットサルリーグチャンピオンズカップ



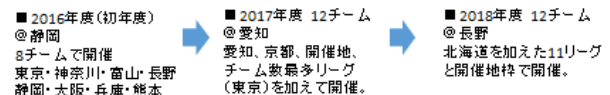
2016年度@静岡
優勝: HeroFC

県でU-18 リーグ戦が行われていたのですが、JFA や JFF が 8 都府県のためだけに大会を開催することは難しいということで、法人格を取得したサロン 2002 が大会を主催することとなり、「U-18 フットサルリーグ・チャンピオンズカップ」という大会を作りました。

2) U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップー現状と今後の課題

第1回目は8チームで開催しました。会場は静岡県のエコパアリーナです。2回目からは12チームで、昨年度は名古屋のオーシャンアリーナ、今年度は長野のこぶきアリーナ千曲での開催です。いずれも地元の協会、連盟の大きな協力を得て開催することができました。

チーム数が増えていく一方で、長野や兵庫から出場しているチームがほとんど勝つことができず、出場枠についての議論もあります。また開催時期について、いまは1月早々に行っていますが、3月の方がよいのではないかという意見もあります。チーム数が16チームに増えた場合、大会を2日間ではなく3日間行うかなどの議論があります。今後チーム数が増えてくるというのは嬉しい悲鳴ではあります。



1. 2019年度も長野での開催を予定。
2. 岡山、奈良などでリーグ開催との声もあり、12以上のリーグが開催される可能性があるが、2日間・1会場で12チーム以上の開催は難しい。
3. 参加対象リーグの検討が必要。たとえば、
 - ・3か月以上の開催期間
 - ・3日以上で開催日程
 - ・チーム数は5チーム以上
4. 兵庫、長野などこれまで結果の出していない県からは地域(関西、北信越など)枠の設定といった(謙虚な)意見もあり。
5. さらに今後は、開催時期(1月？3月？)、16チームでの開催の可能性といった要件も検討していく必要あり。
6. 得点王には賀川浩貴？

3) ディスカッション①

守屋：フットサルはインターハイの種目になっていますか？

中塚：なっていません。インターハイ種目になるにはいくつか段階があります。まず当該競技専門部が全国高体連に加盟していることです。そのためには、47都道府県のうち半分くらいの都道府県高体連に当該競技専門部が加盟していることが条件になります。全国高体連にフットサル専門部はありませんし、サッカー専門部がフットサルを統括しようとは考えていません。女子も加わり、今でさえ手一杯のところ、フットサルまで手が回らないというのが本音でしょう。個人的には、高体連の傘下になるとフットサルの「良さ」が失われてしまうのではないかと思います。学校対抗でなく、いつでも、どこでも、誰とでもできるところにフットサルの良さがあります。けど地方に行けば、高体連に加盟してほしいという声はよく耳にしますし、高体連の中でU-18 フットサルを展開しているところもあります。都心部と地方では温度差がかなりあると感じます。

守屋：フットサル連盟はJFAの傘下になっていますか？

中塚：傘下になっています。しかし、都道府県によってフットサル連盟の性格は異なるようです。例えば東京都などは、リーグ戦をやっている大人を中心に組織され、自分たちで加盟費や会費を払って組織を動かしています。

そこにアンダーカテゴリーが後から加わった形です。青少年からは多くのお金を徴収することはできません。大人は大人で手一杯。育成年代が加わると手が回らなくなるわけです。数年前に東京都ではU-15とU-18のリーグ加盟クラブが東京都フットサル連盟に加盟することになり、加盟費だの登録料だの、新たな出費が発生し、現場は混乱しています。高校生だからということで安く借りられていた施設が大人向けの料金になるなど、連盟傘下に入ることはメリットばかりではありません。日本連盟としては、各都道府県のフットサル連盟に全カテゴリーをまとめてもらいたい考えもあるようですが…。むしろサッカーの「クラブユース連盟」のような組織化を、ユース年代でつくっていく方がよいのではないかとも思います。

本多：熊本のチームとして大会について何かありますか？

谷富：もう嬉しくてたまらないです。リーグ戦自体を高校生が運営しているため、4秒ルールとかバックパスとかジャッジがうまくいきません。ファウルの基準も曖昧です。審判がルール自体をわかっていないという問題もあります。ですからなかなか上を目指すところまでは至っていないですね。旅費が高いため、U-18リーグチャンピオンズカップは今のところ目標にはなっていないですね。

本多：では目標としているところはどこですか？

谷富：神戸の大会と選抜の大会を目標にしていたので、選抜の大会がなくなってしまったのは大きかったですね。

本多：1月は旅費が高いですか？

谷富：そうですね。地方からだとなかなか厳しいですね。

中塚：春高フットサルは今でも続いていますか。

谷富：続いています。名古屋オーシャンズで3/30にやっています。

本多：東京で開催されていたものが続いているのではなく、オーシャンズの母体でもあるバンフスポーツ主催の大会ですね。

常木：リーグ戦の普及、U-18の強化についてお尋ねしたいです。サロン2002でなぜフットサルのリーグ戦を始めようと思ったのかについての最初の動機や経緯はどのようなものなのでしょう。また運営はどのように行われているのかについて教えてください。

本多：資金面ではスポーツくじ toto の助成金を受けて運営されています。また加茂グループと多摩大学がスポンサーとなっています。主管として入っていただいている長野県フットサル連盟が中心となり、長野県のスタッフで運営されています。もちろんリーグ自体はそれぞれの都道府県で協会や連盟と連携して当事者によって運営されています。話が逸れますが、「本多さん、兵庫と大阪でリーグ戦を立ち上げてくださいよ」というお話があったときに、「リーグ戦は外部の人間が運営するのではなく、当事者が運営すべきもの」という考えがあって、それぞれ参加するチームで運営してもらっています。これは中塚先生からの受け売りですが。

中塚：経緯について補足したいと思います。私はフットサルが始まった当初から今まで、東京都サッカー協会のフットサル委員をやっています。1994年にFIFAがフットサルと決め、「世界中にフットサルを」ということとなり、JFAでも全ての都道府県にフットサル担当者を置くことになりました。東京では各種別から担当者を出すこととなり、第2種(U-18年代)からということで私のところに話が来ました。だいたいややこしい話は私のところに来ます。当初は全国大会の予選をやるのがフットサル委員会の仕事で、大人の大会、U-15とU-12の大会がありました。U-18の大会はありませんでしたが、ちょうど2000年ごろの委員会で、U-18年代のフットサルの大会をはじめてはどうかという話が出ました。都内のフットサルコートで高校生が増えている。サッカー部をやめた者、中学までやっていただけで高校でサッカー部を選ばなかった者などがやっているようだ。そしていくつかの学校ではフットサル同好会もできていました。そこで、学校フットサルの可能性を感じ、「仕掛ければ始まるな」との実感を持っていました。高体連のサッカー大会で部員不足で大会に出場することができないチームも増えてきて、5人ならできるやろ、との思いもありました。その頃は東京都ユースサッカーリーグの整備を進めており、サッカーのリーグ戦のない時期にフットサルの大会を行えば両方できるのではないかと考えました。

2001年度から夏と春に東京都サッカー協会主催で単発のフットサル大会をやり始めました。最初はめちゃくちゃでした。負けると体育館の壁を蹴り飛ばしたり。そういったトラブルの尻拭いをしていた時期もありました。アンダーカテゴリーの競技会では、責任能力のある大人がしっかり指導しないとダメです。「責任能力のある大人」は学校の教員である必要はありません。多様なチームを受け入れるためにも、これは大事なところですよ。そのうちレベルも徐々に上がり、もっとやりたい連中がリーグ戦を始めたというのが始まりの10年間です。

次の10年は「横と縦への広がりをやろうよ」と話していたところで本多さんがうちの体育教官室に顔を出し、全国大会をやろうという話になりました。だから、サロンが組織として取り組みをはじめたというよりも、本多と中塚が言い出して、NPO法人となったときに事業として本腰を入れて取り組みを始め、totoの助成をもらって現在に至るという形になりました。

守屋：大会全体としていくらくらいかかりますか？

本多：140～150万円ほどです。

U-18フットサル大会創設の経緯

それは2000年度末、フットサル委員会の議論から始まった


- ◆「都内の民間フットサル施設で、高校生が大勢プレーしている」
↳ 潜在的なフットサル人口の存在
- ◆「いくつかの学校ではフットサル同好会ができています」
 - ・筑波大学附属高校サッカー部に「フットサル部門」創設(1997)
 - ・同校において校内フットサル大会(TFC杯)開始(1998)
 - ↳ 学校におけるフットサルの可能性 ↳ 仕掛ければ広まる!
- ◆「高体連のサッカー大会で、
人数不足により参加できないチームが増えてきた」
↳ 11人は無理でも5人ならサッカーとの共存・共栄

↓

- ★2001年度事業として、夏にU-18フットサル大会を開催しよう!
- ★「東京都ユース(U-18)サッカーリーグ(仮称)」と連動させよう!

「はじまりの10年間(2001～2010)」と、 「次の10年間(2011～2020)」の位置づけ

- ◆「はじまりの10年(創設期)」は、「都内」で立ち上げ、育てた期間
立ち上げ、育てたのは、
 - ①普及目的の夏の大会
 - ②競技志向の冬の大会
 - ③フットサルリーグ



- ◆「次の10年」は「横と縦への広がり」を志向する
 - ①横への広がり ... “関東”そして“全国”への拡大
↳ 隣県との交流から全国大会の開催へ
 - ②縦への広がり ... “底辺”から“頂点”までの拡大
↳ 多様なレベル・ニーズに応じた事業

中塚：toto はかかった経費の 5 分の 4 の助成ですが、5 分の 1 は自分たちで賄わないといけません。サロンとしては赤字です。

守屋：参加している高校生たちは自腹ですか？

谷富：たぶん補助金は出ていないと思います。物販でカレーとかを売ったお金で補っています。リーグチャンピオンズカップは出ていないと思います。熊本からはフェリーに乗っていきます。

本多：長野開催で会場が遠くなり、一番ショックを受けていたのは熊本でした。

守屋：観客は入っていますか？

清水：各チームの保護者がメインになっていると思います。来年以降、長野でフットサルを見る環境が整えば、もっと観客が増えるのではないかと思います。

2. ユース年代にリーグ戦を—日常的なリーグ環境の整備について（中塚義実）

1) 日常的なリーグ環境の整備—ユースサッカー「DUO リーグ」を中心に

ではこのあたりで次の話に移ります。「ユース年代にリーグ戦を」という、サロン 2002 からのメッセージについてです。もちろん U-18 フットサルリーグ・チャンピオンズカップの話とつながっています。

まず日本のユース年代の状況についてお話ししようと思います。中体連や高体連の競技会は、負ければ終わりのノックアウト方式で行われます。これは学校がお休みの時、夏休みや冬休みに集まって短期間でチャンピオンを決めるためであり、短期間のトーナメントはおのずとノックアウト方式にならざるを得ません。スライドではカップ戦と表現しています。非日常的な行事であり、カップ戦だけでは“スポーツの主人公”を育てることはできません。これに対してリーグ戦は、長期間のシーズンそのものを形成し、日常生活の一部となります。当事者たちの自主運営により“スポーツの主人公”が育ち、結果的にクラブが育ちます。

カップ戦	リーグ戦
ノックアウト方式 (負ければ終わり)	総当り方式 (負けても次がある)
短期間	長期間
シーズン中の単発イベント	シーズンそのものを形成
非日常的な行事	日常生活の一部
移動をとまらう	生活圏で行なわれる
主催者が運営	当事者による自主運営

ここで用語の整理をしておきたいと思います。右の資料は、東京都ユースサッカーリーグ立ち上げにあたって整理したものです。クラブとチームとプレーヤーの関係を示しています。リーグに加盟するのはクラブであり、各クラブが、レベルやニーズに応じてチームを編成するという基本的な考え方を理解することが重要です。

名称	手続き	期間	経費	分類
クラブ	加盟	年度	加盟費(分担金)	会員
チーム	登録・参加	リーグ期間	参加費	参加者
プレーヤー	入会	年度	会費	会員
(選手)	登録・参加	リーグ期間	—	参加者
	エントリー	試合ごと	—	出場者

1996 年に文京区・豊島区で高校生年代のサッカーリーグ「DUO リーグ」を立ち上げました。このあたりの背景

や経過はいろんなところで語っているので省略します。「小さく立ち上げ、大きく育てる」方針で、少しずつ仲間を広げていきました。DUOリーグの理念に賛同したクラブが仲間になります。DUOリーグに「入れてほしい」と言ってくるころには、理念とビジョンを伝え、「同志」であることを確認した上で加盟承認する形です。

当初から、この構想を面白いがる“遊び心”ある大人たちが、“Face to Face”であだこうだ言いながら作り上げてきました。大人たちがリーグ戦を、リーグ環境を整備することを楽しんでいました。“遊び心”は不可欠です。

この試みを全国に広げていく働きかけは、JFAnewsでの連載記事や指導者養成講習会などを通して行いました。また東京都内では、DUOリーグモデルのリーグ戦を各地で展開してもらい、底辺からの積み上げで徐々にリーグ環境を整えていきました。底辺は近隣で、上に行くほど広範囲で組織される「東京都ユースサッカーリーグ」を2004年度に始めるべく総会まで開きましたが、うまくいきませんでした。リーグ加盟するのはクラブです。そしてリーグ戦を通して体力のあるクラブ（例えば、熱心な顧問が異動しても長続きするクラブ）を育てていこうという構想でした。学校教育活動よりも地域のスポーツ活動と捉えていたのですが、その考えが理解してもらえなかったということでしょう。学校運動部として参加しようとしたいくつかの学校の校長から「これは学校教育活動として認められるのか」との問い合わせが教育委員会にあり、このまま推し進めるには無理があると判断し、2004年度からのリーグ構想は頓挫してしまいました。

学校の教員だけでリーグ構想を進めていくには無理があります。学校教育としての限界は、最初からわかっていたことです。卒業生や地域の人材を巻き込みながら展開していかなくてはなりません。無理して学校の先生だけでやろうとしているから“遊び心”が失われている…。これが現在の状況だと考えます。

2) サロン2002からのメッセージユース年代にリーグ戦を

NPO法人サロン2002では2017年度から、totoの助成を受けて広報誌『遊ASOBI』を発刊しています。第2号はもうじきできあがりますが、今年度の広報誌には「サロン2002からのメッセージ」を二編掲載しています。その一つが今回のテーマである「ユース年代にリーグ戦を」です。

広報誌に掲載した「サロン2002からのメッセージ」から一部引用します。これは第3回U-18フットサルリーグ・チャンピオンズカップ報告書からの抜粋でもあります。

(前略)

ここで改めて、私たちが考える「リーグ環境」「リーグ戦」について述べておきます。

リーグ戦は“組織”です。特定の個人や業者に任せて「総当たり戦を行う」ものではありません。ゲームを楽しむ人たちが自身で自分たちの活動をささえる—自主運営と受益者負担が原則です。ささえる活動を楽しむマインドが根底にあります。

リーグ戦は“生活”です。平日のトレーニングと週末のゲームで1週間の「サイクル」を形成し、リーグ期間が「シーズン」となります。ワンデーマッチで「総当たり戦を行う」ことではありません。リーグ期間をどこに持っていかは大きな課題です。地域ごとの事情もあるでしょう。皆さんからのご意見をいただければ幸いです。

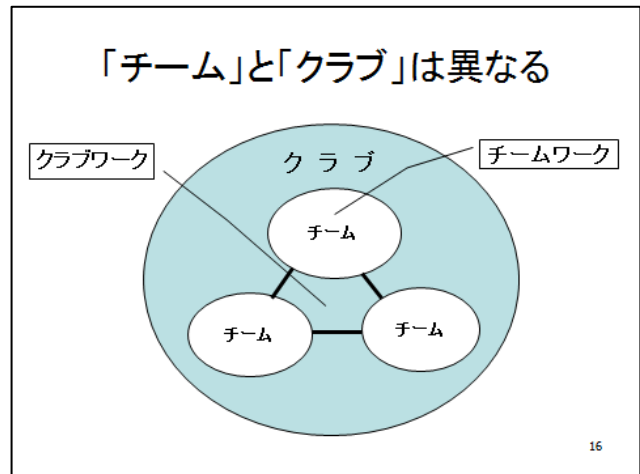
リーグ戦は“あそび”です。“あそぶ”の前につける形容詞は「自然に」「ちゃんと」「本気で」「徹底的に」がふさわしいでしょう。定期的に“あそぶ”仕組みがリーグ戦です。言われたから「総当たり戦を行う」ではありません。やりたいから、やりたい人がやるのです。

(後略)

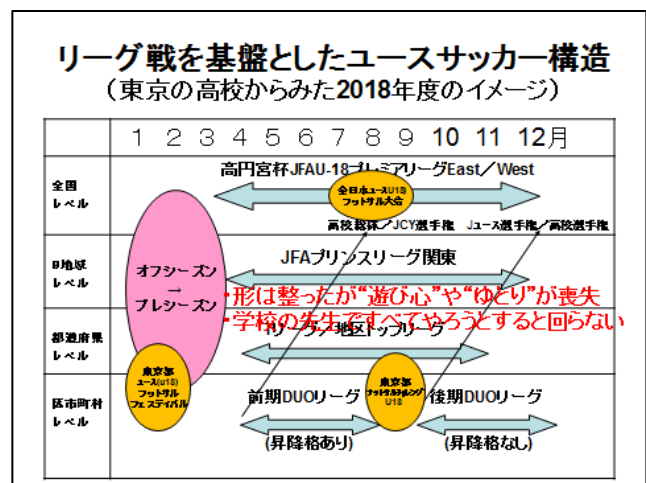
まず1つ目は「リーグ戦は組織である」ということです。特定の個人や業者に任せて総当たり戦をやることではありません。試合を楽しむ人たちが自身で自分たちの活動を支える自主運営と受益者負担が原則です。さらに支えることも楽しいということをまず知ってもらう必要があります。

“組織”についてはこう考えます。チームはゲームを行う単位、クラブは多様な人材が集まる単位ということです。チームはクラブに含まれます。そしてクラブの連合組織がアソシエーションであり、協会や連盟、あるいはリーグがこれにあたります。

ここで大切になってくる考え方が「補完性原理」というものです。EU 統合の基礎理論であったこの考え方は、「自分でできることはすべてする、できないことは家族で。家族でできることはすべてする、できないことは地域で。地域でできることはすべてする、できないことは自治体で…」というように、底辺からの積み上げの発想です。スポーツにおきかえると、個人→チーム→クラブと底辺から積み上げ、個々のクラブでは解決できないことについて、より上位の組織であるアソシエーションやリーグを整備するということです。トップダウンではなく底辺からの組織化です。1863年にFAがイングランドで生まれたときも、クラブごとに異なったルールで行われていたフットボールのルールを統一しようという関係者が集まったもので「底辺からの組織化」です。逆に日本では、イングランドから銀杯が届いたのでこれを争奪する競技会を開くために組織が必要になったという「上からの組織化」でした。日本では上から降りてこないとなかなか動かない側面もありますが、補完性原理はリーグ環境の整備には不可欠の思想です。



2つ目は「リーグ戦は生活である」ということです。平日のトレーニングと週末のゲームが1週間のサイクルを形作り、リーグ期間がシーズンとなります。ワンデーマッチで総当たり戦を行うことではありません。ここで大切なのは、リーグ期間をどこに設けるかということです。これは地域ごとに事情は異なるでしょうし、スポーツライフをどのように形作るかともつながってきます。サッカーリーグのオフシーズンにフットサルリーグを持ってくれば年中フットボールができますが、シーズンごとに取り組むスポーツを変えるスポーツライフの方が健全です。いろんなスポーツでリーグが整備され、年間を通して様々なスポーツを選択しながらユース年代が豊かなスポーツライフを楽しめる環境が求められます。



3つ目は「遊び」ということです。自然に、ちゃんと、本気で、徹底的に、遊ぶのです。そして定期的に遊ぶ仕組みがリーグ戦です。やれと言われたからやるのではなく、やりたい人がやるのです。

当たり前のことですが、ユースサッカーリーグを整備している過程で感じたのは、「公認化するからリーグを整えないといけない」「上に合わせよう」との意識が

高校サッカーの現場から

ユースサッカーリーグとU-18フットサルからみえるもの

■部活動のこれから—“遊び”を続けるには

- ・「学校教育活動(=まじめ?)」であれば、保護者は安心、生徒は出やすい、施設も使いやすい、その代わり、教師の負担が増える
- ・「地域のスポーツ活動(=遊び?)」であれば、もっと自然にできるはず(本来のスポーツはこころ)、その代わり、自分のことは自分で! (=「ちゃんと遊べ!」)
- ・学校であっても地域であっても、青少年の活動に教育的な視点・配慮が必要なのは「当たり前!」

学校だから教育的?
地域クラブ(外部指導者)だから非教育的?(競技志向?)

そんなことはまったくくない(はず)!
青少年の活動に教育的な視点・配慮は「当たり前」(のはず)!

学校だと“まじめ”が強調され、“遊び”が否定される傾向にあるが、
「ちゃんと遊べ!」
このような観点から、部活動を見直すことが必要

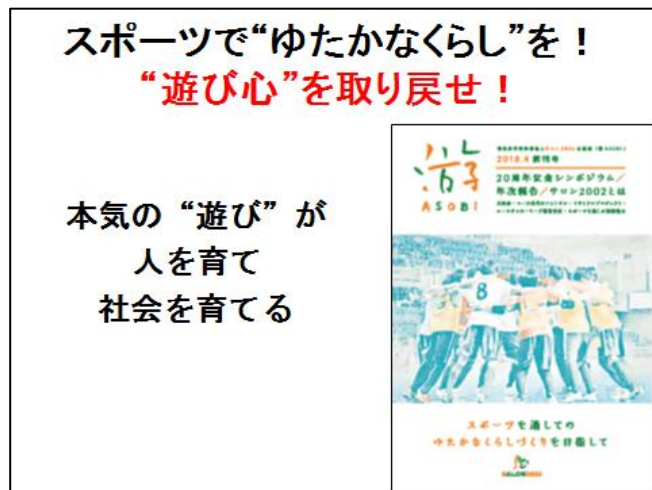
強くなったあたりから、大人の“遊び心”が失われていったことです。

配布資料「技能差のある生徒をどのように始動すればよいですか」は、体育教師が読む月刊誌『体育科教育』の2005年6月号に書いたものです。技能差、体力差、あるいは男女差のある集団でどのようにサッカー授業を展開していくかに言及したものです。ここでもキーワードは“遊び心”です。

- ①ルールは自分たちで考える
- ②自己申告に基づくルールの適用
- ③明確なルールよりもルールの理念の共有化を、
- ④ゆとりあるスポーツ観がベース。

こういった“遊び心”ベースに置きながらリーグ環境を整える。「総当たり戦をする」ことよりもむしろ、考え方をしっかりと浸透させていくことが不可欠です。形だけ整えても意味がありません。

このあたりが今回のメッセージの部分です。



3) ディスカッション②

沼田：去年大学の講義で「遊びとスポーツの関係」についての授業を受けました。スポーツの語源が「遊び」という話を聞いていて、オリンピックとかが経済志向になっていくにつれて、そういった「遊び」という感覚が失われていったというお話を聞いており、そのなかでこういった高校サッカーのような「遊びの大切さ」を取り戻すというところにすごく共感を致しました。

錦戸：自分自身1年前から母校に戻って指導者としてやっているのですが、「上からの組織化」というところが自分のなかで心にしみました。あと「遊び心」というところが印象に残っています。「上からの組織化」と「底辺からの組織化」というところで、1年間の指導を通じてフットサルというのはかなり特殊な戦術を用いて行うというところで、指導者が教えて選手に伝えるのではなく、選手の側からチーム・クラブを強化していくことが大切なのかなと思いました。

茅野：サッカーには引退は言葉はありません。活躍の場面が変わるというだけです。自分たちが楽しむ環境を自分たちで作っていくということがこれからますます求められてくると思います。クラブにカテゴリーやファームという概念があってさらにその中にチームという概念があるのではないかと思います。

チェ：私が仕事で触れることができない分野を今日学ぶことができ良かったです。普段私が仕事しているところはお金をもらってサッカーができる環境を作ってその参加費を運用しているところが多いので、こういった事業についての知識がなかったのですが、こういったものがあるからこそ支えていただけるということ感心しました。あと、私は韓国出身ということで、学生がサッカーなどのスポーツをやりたくても勉強が第一と考えるところが多かったので、少しやりたくてもスポーツをさせてくれる人がいないということもあり、そのような環境は日本と比べて少ないなと感じました。遊び心を基に、自分たちで責任を持って運営していくという姿がすごく勉強になりました。

岸：「遊び」というキーワードがありましたが、「遊び」をキーワードに様々なことが考えられるなど感じました。遊ぶためには色々な責任も伴うし、ルールを明確化しようという動きはDUOリーグでも出てきて、自分たちで考えることを止めてしまう風潮があるなど感じています。ルールがあるとそれに沿って行えば良いので考える必要性がなく楽（らく）ですが、その分自分たちでグレーゾーンをうまく活用していくのはすごく面白いなと思います。それは障がい者スポーツでも活用されていて、パラリンピックは割とグレーゾーンを減らそうとしているスポーツで、クラス分けがすごい細かくあります。けどそうすると逆に、クラス分けに入れない人たちがスポーツをできなくなったりしています。遊びをキーワードに色々なスポーツの場面を語るができると思いました。

中塚：では最後に本多さんの方でまとめをお願いします。

本多：関西では、京都、大阪、兵庫でU-18リーグが行われていますが、最初はチーム数も少ないので、関西のリーグをつくろう、ということでスタートしました。チーム当事者で相談しながら、将来的には府県での協会、連盟の公式のリーグが目標でしたので関係者にも事前に相談しながら進めました。名称については、「リーグは協会、連盟が主催するもの」という意見があり、「プレリーグ」にしました。また、「関西」もよろしくない、ということで、「U-18 フットサルプレリーグ WEST」として岡山県の作陽高校と大阪成蹊大学の1年生にも入ってもらってリーグが立ち上がりました。数年後には3つの府県リーグが生まれて、関係者の願いが叶ったのですが、そうすると中塚さんの話にあったような「硬直化」がみられるようになりました。そこで、改めて関西での交流戦、リーグじゃなくて、ができないかという議論が生まれています。きっとサッカーの世界では何十年も前からこんな話が繰り返されてきているのだと思います。皆さんに本日お配りした大谷四郎さんの記事にも同じような問題意識と、「遊び」ということが記されています。目の前にある新しいテーマとしてU-18フットサルの話をしましたが、今も昔もかわらない普遍的なテーマであることに力づけられながら、引き続き模索していきたいと思いますので、よろしくお願いたします。

以上。続きは「旺達」で